

ちょっと裏話

ちょっと裏話①「佛子園発祥母体 妙林山行善寺」

1418年(応永25)、日蓮の孫弟子日像上人が開基した古刹。インドのピシュケマ(備首渴摩)王が刻ませた仏母摩耶夫人の釈迦生誕の秘像が安置されていて、授子安産の道場として広く伝承されています。幼くして母と死別した文豪・泉鏡花がこの摩耶夫人像に母の面影を偲び、終生にわたり敬慕し参詣することを楽しみとし、鏡花の「美と幻想の作品世界」に多大な影響を与えたといわれます。また、境内には日像上人ゆかりの需木、妙林柿があり、数百年の歴史を永劫に伝えています。当法人は、今から40年余り前、日蓮宗行善寺住職、故・雄谷本英氏(初代理事長)が宗教誌の販売をしながら行き場のなくなった子供たちを庫裏に引き取ったことから始まりました。

ちょっと裏話②「民話 妙林柿と行善寺」

むかしむかし。秋の夕暮れどきのこと。村のあかりをたよりに近づいてくるひとりのお坊さんがいた。

小さなわらぶきの家から、わずかに灯が見えたので、お坊さんは家の前に立って「どなたかおいでなさんか」と声をかけた。すると「どなたかのおー。こんな夕暮れどきに。何の用じやろう」と、ずいぶん年をとったおばあさんが顔を出した。お坊さんは「旅の途中の者です。すっかり日が暮れてこまっております。どうか軒下でもいいから一夜の宿をおねがいできんものか」とたのんだ。おばあさんは「なんのなんの、みたとおりのあばら屋で、なんのもてなしもできんが、こんなところでよけりゃ、ゆっくりなされりゃいい」と言って家の中へ案内した。

ちらちらと燃える‘いろり’のわきに通されるとお坊さんはたいそうよろこび、越後から京への旅の途中であることなどを話し始めた。お坊さんの話をいっしょうけんめいに聞いていたおばあさんは、深く感動して思わずお坊さんに向かって手を合わせた。

それから、どれだけの時がたったろうか、おばあさんは「貧しい暮らしで、米などとても食べられんが、麦のおかゆじゃがひとつ食べてくだされ」と言って箱膳を差し出した。

お坊さんは、ていねいに頭を下げてお礼を言い、箸をとりながら、話を続けた。

目を輝かせ、話を聞いていたおばあさんは、とっておきの柿があるのを思い出し、大切そうに出してきて‘いろり’の火で焼いて「渋柿じゃが、焼けばうまくなるで」と言って、お坊さんに差し出した。お坊さんは「これは珍しいものを。焼いた柿を食べるのは初めてじゃ。どれ」と感心したようだった。

あくる朝、お坊さんはお礼を言うとまた旅に出ようとした。

おばあさんは「ひとつお願いがあるんやが。私は髪を下ろし尼として仏様の教えを守っていきたい。どうかお坊さんの弟子にしてくだされ」と言った。お坊さんは突然のことでびっくりしたが、おばあさんのあまりの熱心な気持ちに心打たれた。

お坊さんは尼になったおばあさんに‘妙林’という名前をつけた。おばあさんはたいそうよろこんだ。お坊さんは信心深い人がまた一人増えたことをたいそう喜び「そうじゃ昨日の夜いただいた柿の種を庭にまいておく。そなたがこれからも私の教えを守り、信心深ければきっと柿は芽を出し、たくさんのみをつけることじやろう。」と言って黒く焼けこげた柿の種を手のひらにのせ、七回お経を唱えて、ねんごろに土に植えた。

おばあさんは、それからずっとお坊さんの教えを守り、尼として暮らした。それから何年もたつうちに、柿の種のことをすっかり忘れてしまっていた。けれど、あるときふと思い出してその場所へ行ってみるとなんとまあ黒く焼けこげたはずの種から柿は生き生きとした芽を出しておった。尼となったおばあさんは、いまさらながらに、あのお坊さんの偉さにおどろいた。

その後何年かたって、おばあさんは京に上ってお坊さんを訪ねた。おばあさんは柿の種のことをお坊さんに話すと、お坊さんは「それはそれは、結構なことじゃ。そなたの信心のおかげじゃ」とたいそう喜ばれた。「そんならこれを」と言って一体の仏像をおばあさんに授けられた。おばあさんは大事に村へ持って帰り、粗末な家じゃったがねんごろに安置し村人とともに朝夕にお参りした。

それから何年かたったある秋のこと、お坊さんの植えた柿の木には黒い種の大きな実がたくさんなったということじゃ。この柿を村人たちは「妙林柿」と呼んでいつまでも大切にしていたということじゃ。

終わり